

屋嘉比収 略年譜・主要著作

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

247

(終了ページ / End Page)

254

(発行年 / Year)

2012-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008003>

屋嘉比 収 略年譜・主要著作

【略年譜】

- 一九五七年 一月 一日 糸満町に生まれる
- 一九七五年 三月 沖繩県立糸満高等学校卒業
- 一九八二年 三月 沖繩国際大学商経学部経済学科卒業
- 一九八六年 一月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究生修了
- 一九八九年 三月 琉球大学大学院法学研究科修士課程修了
- 一九八九年 六月 那覇市企画部文化振興課市史編集室嘱託（一九九四年三月）
- 一九九〇～九五、九九～二〇〇三年度 沖繩大学・琉球大学・沖繩国際大学にて非常勤講師
- 一九九九年 三月 九州大学大学院比較社会文化研究科日本社会文化専攻博士後期課程単位取得退学
- 二〇〇四年 四月 沖繩大学法経学部助教授に着任（のち准教授）
- 二〇一〇年 九月三〇日 死去（享年五三）
- 二〇一〇年 一二月 第三一回沖繩タイムス出版文化賞正賞受賞（『近代沖繩』の知識人）吉川

弘文館)

二〇一一年 二月

第三八回伊波普猷賞受賞（『沖繩戦、米軍占領史を学びなおす』世織書房）

【主要著作】 *冒頭に特記なきは論文（単著）

一九八九年六月

可能性としての「方言論争」——柳宗悦の言説を読む（『新沖繩文学』第八〇号、特集・沖繩と柳宗悦——柳宗悦生誕百年記念、沖繩タイムス社）

一九九〇年三月

「海を歩く」人々の思想——糸満漁民考（『新沖繩文学』第八三号、特集・糸満・ウミンチューの世界、沖繩タイムス社）

一九九〇年一二月

玉野井理論における方法的視座の転換——客観性から主体性へ（『新沖繩文学』第八六号、特集・玉野井芳郎と沖繩、沖繩タイムス社）

一九九一年一二月

「沖繩戦」を考える（位置）（『脈』第四四号、特集・沖繩戦、脈発行所）

一九九二年一二月

鏡からテキストへ——マレピトの戦後沖繩に関する言説の変容（『新沖繩文学』第九四号、特集・マレピトの視線——沖繩を見つめる人々、沖繩タイムス社）

一九九三年六月

日琉同祖論から地域固有性へ（宮良高弘編『日本文化を考える——北と南からの視点』第一書房）

一九九四年三月

沖繩方言論争における柳宗悦の思想（『沖繩文化』第二九卷第一・二号Ⅱ通巻第七九・

八〇合併号、沖縄文化協会)

一九九四年一月二十四日～九五年二月七日 《新聞連載》 島袋全発〈人物列伝・沖縄言論の百年〉
(『沖縄タイムス』全五一回連載)

一九九六年一月 沖縄、土地の記憶——パトリオティズムの思想 (『神奈川大学評論』第二五号、特集・沖縄・アジアからの戦後半世紀、神奈川大学広報委員会)

一九九七年三月 「琉球民族」への視点——伊波普猷と島袋全発との差異 (『浦添市立図書館紀要』第八号、特集・伊波普猷没五〇年記念、浦添市立図書館)

一九九七年八月 『琉球人種論』の背景——伊波普猷と鳥居龍蔵との交流 (『がじゅまる通信』第一二号、榕樹書林)

一九九七年八月 「沖縄」に穿つ思想として——新川明さんへの手紙 (敍説舎編『文学批評 敍説』第一五号、特集・検証 戦後沖縄文学、花書院)

一九九八年一〇月 〈沖縄〉という当事者性の展開——「琉球民族」への視点を通して (『歴史学研究』第七一六号・大会増刊、歴史学研究会) ※一九九八年度歴史学研究会大会・近代史部会報告

一九九九年三月 古日本の鏡としての琉球——柳田国男と沖縄研究の枠組み (『南島文化』第二二号、沖縄国際大学南島文化研究所)

一九九九年十二月 《対談》資料館問題を開く (『けし風』第二五号、特集・検証・平和資料館問題、新沖

縄フォーラム刊行会議 ※対談者：岡本恵徳

二〇〇〇年三月 基礎資料整備と方法的模索——近代沖繩思想史研究の現状と課題（『史料編集室紀

要』第二五号、沖繩県教育委員会）

二〇〇〇年五月 《編集委員》「沖繩を知る事典」編集委員会編『沖繩を知る事典』（日外アソシエー

ツ） ※計二三項目執筆

二〇〇〇年六月 ガマが想起する沖繩戦の記憶（『現代思想』第二八卷第七号、特集：脱冷戦と東アジア、

青土社）

二〇〇一年一二月 《編集委員》新沖繩フォーラム『けーし風』編集運営委員（第三三号） ※同誌

上に寄稿、座談会司会等の記録多数（詳しくは、『けーし風』第六九号、二〇一〇年一二

月、「資料」本誌における屋嘉比収さんの軌跡）を参照）

二〇〇二年四月 伊波普猷における「沖繩学」の形成——日琉同祖論と比較言語学の影響（『東北

学』第六号、総特集：〈南〉の精神史、東北芸術工科大学東北文化研究センター）

二〇〇二年五月 歴史を眼差す位置——「命どう宝」という発見（上村忠男編『沖繩の記憶／日本の歴

史』未来社）

二〇〇二年六月 戦没者の追悼と平和の礎（『季刊戦争責任研究』第三六号「二〇〇二年夏季」、特

集：靖国問題と戦没者追悼、日本の戦争責任資料センター）

- 二〇〇二年一二月 越境する沖繩——アメリカニズムと文化変容（『岩波講座 近代日本の文化史9 冷戦体制と資本の文化（一九五五年以後）』岩波書店）
- 二〇〇三年二月 《編集委員》「沖繩を知る事典」編集委員会編『沖繩を深く知る事典』（日外アソシエーツ）※計五項目執筆、他に一項目の鼎談記録で司会
- 二〇〇三年六月 殺されたくないし、殺したくない——沖繩の反戦運動の根（『現代思想』第三二巻第七号、特集：反戦平和の思想、青土社）
- 二〇〇三年六月 近代沖繩におけるマイノリティー認識の変遷（『別冊「環」』6 琉球文化圏とは何か（藤原書店）
- 二〇〇三年一〇月 「水平軸の発想」／私的覚書——「集団自決」を考える視点として（『琉球アジア社会文化研究』第六号、琉球アジア社会文化研究会）
- 二〇〇四年七月 仲間内の語り排除するもの（『EDGE』第一三三号、総特集：イメージのイクサ場——特集1「琉球電影列伝」（翻訳）と〈分有〉の鼓動、APO）
- 二〇〇五年二月 顕現する「国境」——沖繩与那国島の密貿易終息の背景（岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社）
- 二〇〇五年四月 沖繩のアイデンティティと「沖繩文化」の発見——沖繩学、日本民俗学、民芸運動の交流／復帰運動と戦後沖繩の思想（豊見山和行・高良倉吉編『琉球・沖繩と海上

の道（街道の日本史56）吉川弘文館

二〇〇五年五月 銃口はどこへ向けられたか——（場）を開いてゆくために（黒澤重里子編『沖国大

がアメリカに占領された日』青土社）

二〇〇六年三月 沖繩戦における兵士と住民——防衛隊員、少年護郷隊、住民虐殺（『岩波講座アジ

ア・太平洋戦争5 戦場の諸相』岩波書店）

二〇〇六年九月 自らの内側を穿つ思想——新川明の「反復帰」論（『季刊前夜』第九号、影書房）

二〇〇六年一〇月 沖繩のアイデンティティを語ることに、そして語りなおすこと——「沖繩研究」の

現在について（新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『沖繩の自立シマの力（下）——沖繩か

ら何を見るか沖繩に何を見るか（沖繩大学地域研究叢書7）コモンズ）

二〇〇六年一二月 《共編著》『沖繩の占領と日本の復興——植民地主義はいかに継続したか』（青弓

社）※共編者…中野敏男・波平恒男・李孝徳

二〇〇七年二月 岡本恵徳の作法（『すばる』第二九巻第二号、特集「復帰」35年 オキナワの「心熱」、

集英社）

二〇〇七年三月 「日本語」「日本民族」の編成でいかに翻弄されたか——沖繩の郷土史家・島袋全

発の軌跡（古川ちかし・林珠雪・川口隆行編『台湾・韓国・沖繩で日本語は何をしたか』

三元社）

- 二〇〇七年一〇月 《座談会》今を聴くこと、語りを開くこと——比嘉豊光『島クトゥバで語る戦世』をめぐって（『写真〇年 沖縄 photographers' gallery press 別冊』photographers' gallery）※座談会参加者：仲里効（司会）・西谷修・比嘉豊光
- 二〇〇七年一月 近代沖縄像の表象と組み替え（『沖縄文化の軌跡 1872-2007』NPO法人沖縄県立現代美術館支援会 happ）
- 二〇〇八年七月～〇九年一月 《叢書共編》シリーズ『沖縄・問いを立てる』全六巻（社会評論社）
※共編者：近藤健一郎・新城郁夫・藤澤健一・鳥山淳
- 二〇〇八年一〇月 《編著》『沖縄・問いを立てる 4 友軍とガマ——沖縄戦の記憶』（社会評論社）
- 二〇〇八年一〇月 戦後世代が沖縄戦の当事者となる試み——沖縄戦地域史研究の変遷、「集団自決」、「強制的集団自殺」（屋嘉比収編『沖縄・問いを立てる 4 友軍とガマ——沖縄戦の記憶』社会評論社）
- 二〇〇八年一〇月 「反復帰論」を、いかに接木するか——反復帰論、共和社会憲法案、平和憲法（『情況』第三期第九卷第八号、情況出版）
- 二〇〇八年一二月 「日琉同祖論」という言説（九州史学研究会編『境界のアイデンティティー——九州史学』創刊五〇周年記念論文集上」岩田書院）
- 二〇〇九年九月 米軍占領下沖縄における植民地状況——一九五〇年代前半の個と情況について

(岩崎稔・上野千鶴子・北田暎人・小森陽一・成田龍一編著『戦後日本スタディーズ1
「40・50」年代』紀伊國屋書店)

二〇〇九年一〇月 《単著》 『沖繩戦、米軍占領史を学びなおす——記憶をいかに継承するか』(世織書房)

二〇一〇年三月 《単著》 『近代沖繩』の知識人——島袋全発の軌跡』(吉川弘文館)

二〇一〇年一月 沖繩現代史を東アジアのなかで叙述する可能性(方法としてのアジア/方法としての沖繩)研究会編『アジアのなかで沖繩現代史を問い直す——新崎盛暉『沖繩現代史』韓国版・中国語版刊行記念シンポジウム(沖繩大学地域研究所ブックレット11)』沖繩大学地域研究所)

二〇一一年三月 自らを穿つ思想——岡本恵徳「水平軸の発想」について、中国の読者へ(『けーし

風』第七〇号、新沖繩フォーラム刊行会議) ※『熱風学術』第四輯(二〇一〇年八月)に

岡本恵徳「水平軸の発想——沖繩の『共同体意識』について」の中国語訳とともに訳載

(翻訳:胡冬竹)